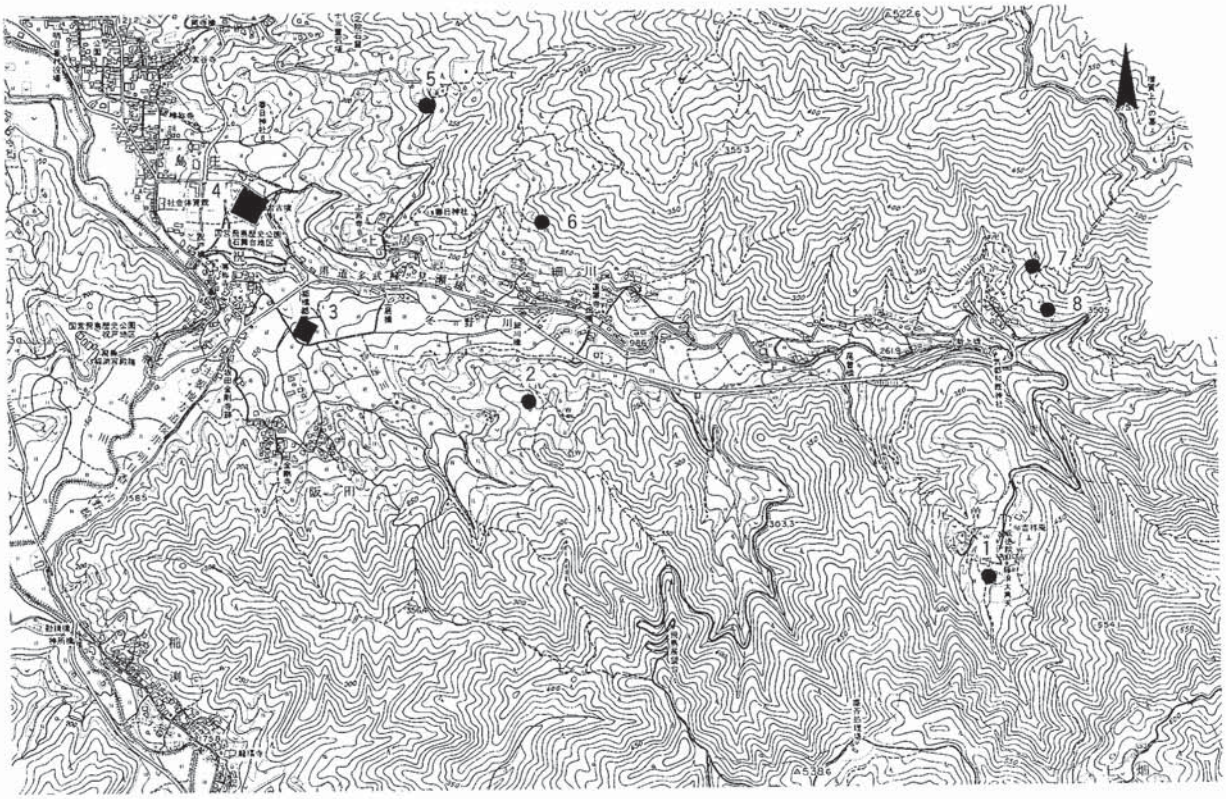
細川谷古墳群・堂ノ前塚古墳誌

西光　慎治

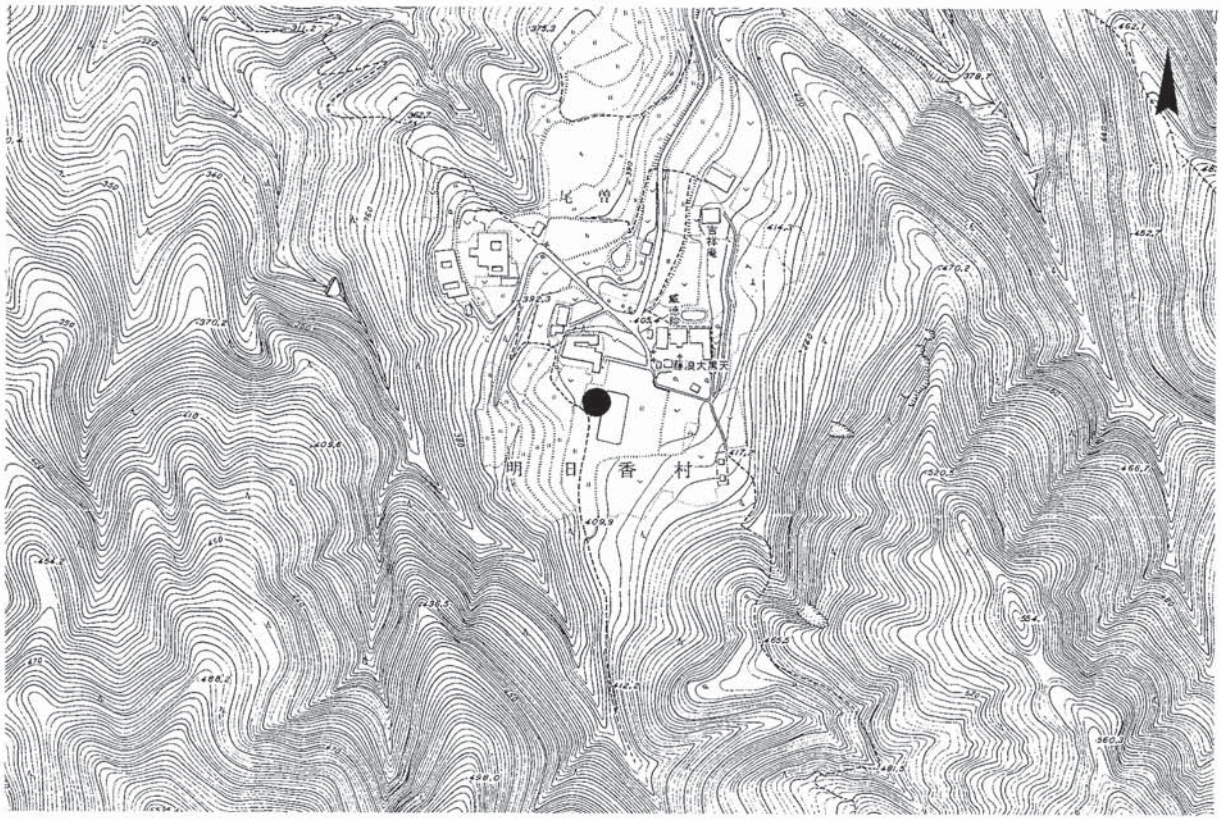
Ⅰ、はじめに ～細川谷古墳群研究序説～

細川谷古墳群は奈良県高市郡明日香村大字上居・細川・上・尾曾・阪田に広がる地域に総数200基以上もの古墳が点在している。奈良県では龍王山古墳群や巨勢山古墳群、寺口千塚古墳群と並ぶ一大古墳群である。細川谷古墳群は多武峯から源を発する冬野川を中心として左岸と右岸に分布しており、右岸には岩屋山古墳に先行するとされる打上古墳（白石1974）や凝灰岩の刳り貫き石棺を有する上居49号墳（泉森他1976)、大正時代に剣が出土したとされる七曲塚古墳（伊達1974)、そして大量の馬具やミニュチュア炊飯具などが出土した上５号墳（清水他1999）などが存在している。しかし左岸に展開する古墳については発掘調査例もなくほとんど実態がわかっていない。唯一、堂ノ前塚古墳で明治時代に石棺や遺物が出土しており『奈良縣高市郡古墳誌』（以下、『古墳誌』）の中に発掘時の様子や遺物の写真が掲載されている程度で写真の精度や遺物について詳細なデータが記されておらず不明な点も多かった。そこで今回、堂ノ前塚古墳の所在地と遺物の消息について数年かけて追跡調査を行い、このほど堂ノ前塚古墳出土の遺物を実見する機会を得たので紹介していく。

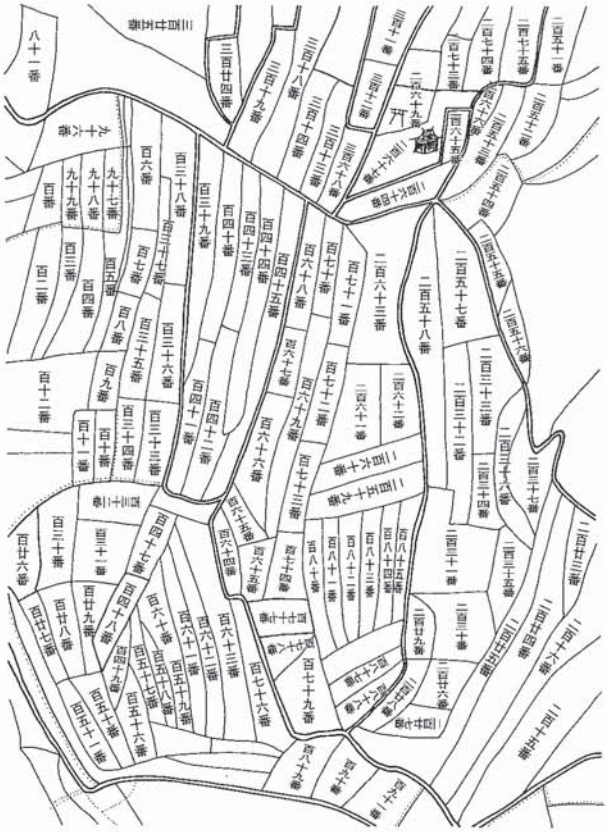


1．堂ノ前塚古墳　2．戒成組田古墳　3．都塚古墳　4．石舞台古墳
5．上居49号墳　6．打上古墳　7．七曲塚古墳　8．上５号墳

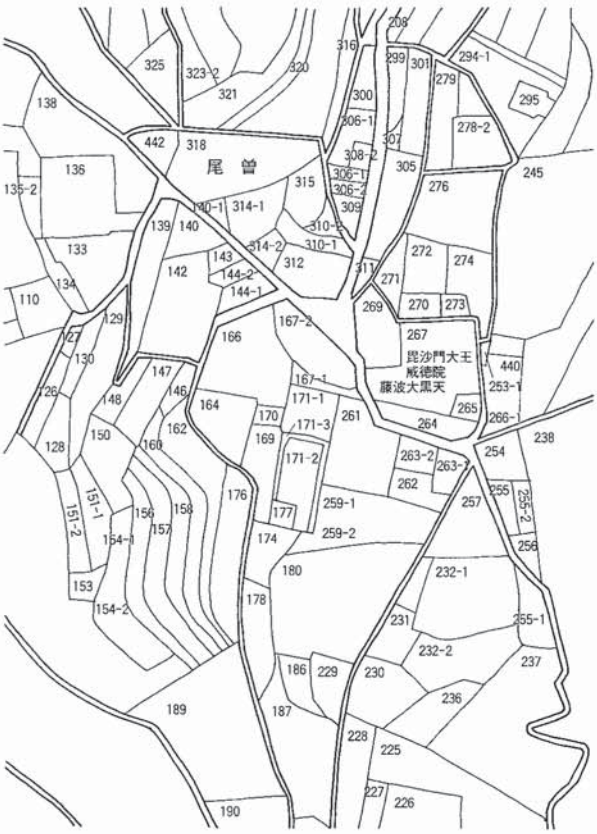
第１図　堂ノ前塚古墳周辺図（１：20000）



第２図　堂ノ前塚古墳位置図（１：5000）



（大和國第四大區三小區）



（奈良県高市郡明日香村地籍図）

第３図　堂ノ前塚古墳　地籍図

Ⅱ、堂ノ前塚古墳の履歴書

堂の前塚　高市村大字尾曾字堂ノ前169、173番合併地

現今全く荒廃に歸し、開墾されて田地となって居るから、舊形を知ることが出来ない。同一の水田に約五間を隔てゝ二古墳あったものゝ様である。第一は既に明治三十二三年頃に全部發掘されてその石材は他に使用し、其時一個の粗製組合せ式石棺を發見し現に同大字浦野駒吉の所藏になって居る。その大きさは縦横約三尺に五尺位のもので六枚の石材からなって。石質は緑泥片岩である。發掘者の言によると、此の石棺の外側には四隅に鐵鈴各一個宛配置せられ、更にその鈴と鈴との間を續いた鐵の棒の様なものがあったといふている。同人の言に從って想像圖を描くと第一圖（第４図参照）のやうなものである。因にその鐵鈴三個と鐵棒の破片及土器一個とは前記浦野駒吉の所藏に歸してゐる。第二の古墳は半分破壊されて尚半分許土中に埋没して居るといふ事である。該古墳は紫盖寺跡にあったものゝやうである。

以上、『古墳誌』に掲載されている全文であるがこの中から主な事項について要約すると以下のようになる。

1、堂ノ前塚古墳は明治22年か23年頃発掘された。
2、同じ水田に約五間（９ｍ）離れてもう一基、古墳が存在していた。
3、石室は両袖式の横穴式石室である。
4、玄室の中央には緑泥片岩製の石棺が安置されており、規模は長さ五尺（約1.5ｍ）、幅三尺（約90㎝）あり合計６枚の石材から構成されている。
5、石室内からは石棺の外側四隅に鉄鈴が置かれており、その鈴と鈴の間を鉄棒のようなものでつながれていたらしい。

上記の内容は発掘していくらか時間が経過してからの聞き取りと考えられるが石室内の様子や復元図などが詳しく記されており、当時から関心の高い古墳であったことが窺える。

【堂ノ前塚古墳の所在地の検討】

堂ノ前塚古墳については『奈良県遺跡地図』（平成10年度発行）によると「17－B－209　堂ノ前塚　奈良県高市郡明日香村尾曽字堂ノ前109、173」と記されている。109番地は169番地の誤植と思われるが分布図をみると真言宗豊山派威徳院に隣接した北側の田圃にドットされている。この場所を調べると字堂ノ前ではなく、また古墳がみつかったということも伝えられていない。そこで改めて堂ノ前塚古墳の所在について明治12年１月に作成された『大和國第四大逼三小逼』を調べた結果、威徳院の南西場所に「字堂ノ前」があり地番も百六十九番、百七十三番地と合致する土地が存在することが明らかとなった。

この169番地と173番地は合併地のようで土地の履歴をみると明治35年３月に浦野駒吉氏の所有となっている[1)]。明治時代の地籍図では169と173番地は横に隣接してあり現在の地籍図には169番地の東隣が171－2、3番地で溜池となっている。この溜池は字儀半畑であり字堂ノ前ではないが173番地が169番地と合併地であることや同じ田圃でもう一基古墳が見つかっていること、『古墳誌』には開墾されて田地となっていると記されていることなどを総合すると堂ノ前塚古墳は169番地に存在していたと考えられ、もう一基の古墳が現在の溜池付近で見つかったものと考えておきたい。

【埋葬施設】

≪石　室≫

石室については当時の聞き取り調査と復元図からある程度推定することができる。

石室は復元図から両袖式の横穴式石室であることがわかる。石室の規模については記されていないが復元図に石棺と鉄片、石室壁面の間が各1.5尺と記されていることから石棺から壁面までの距離は約90㎝であることがわかる。これを反転して石棺の幅三尺（約90㎝）をたして石室幅を復元すると約2.7ｍとなる。玄室長は記されていないが細川谷古墳群の他の横穴式石室の規模を参考に復元すると玄室長は石室幅の1.5～1.7倍程度と考えられることから４～4.6ｍに復元することができる。羨道についても他の石室との比較から長さ約３ｍ、幅約1.2～1.3ｍとなり石室長は７ｍ前後に復元できる。

≪石　棺≫

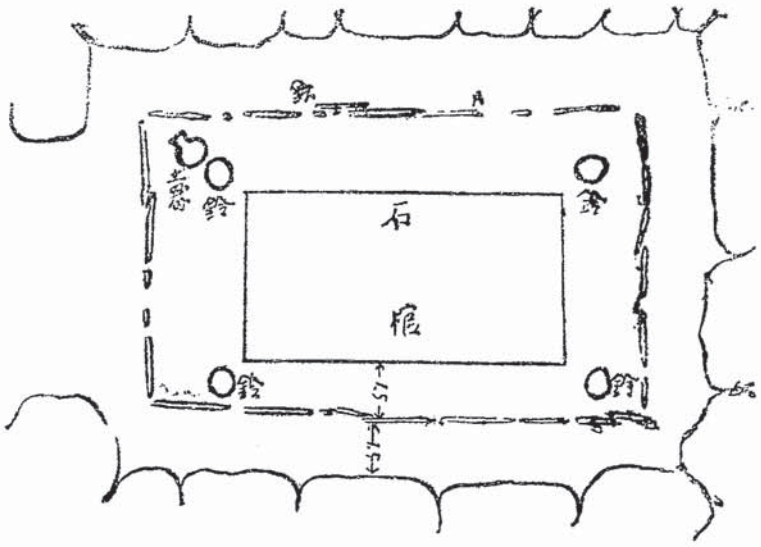
石棺については緑泥片岩製[2]の組合式箱式石棺である。規模は長さ５尺（約1.5ｍ）、幅３尺（約90㎝）で構造は左右の小口各１枚、両側石各１枚、底・蓋石各１枚の計６枚で構成されている。棺材には溝などの細工は施されていない。現在石棺の消息については不明である。結晶片岩の石棺については細川谷古墳群では他に石舞台４号墳（橿考研1976）や戒成組田古墳[3]でも確認されている。

≪木　棺≫

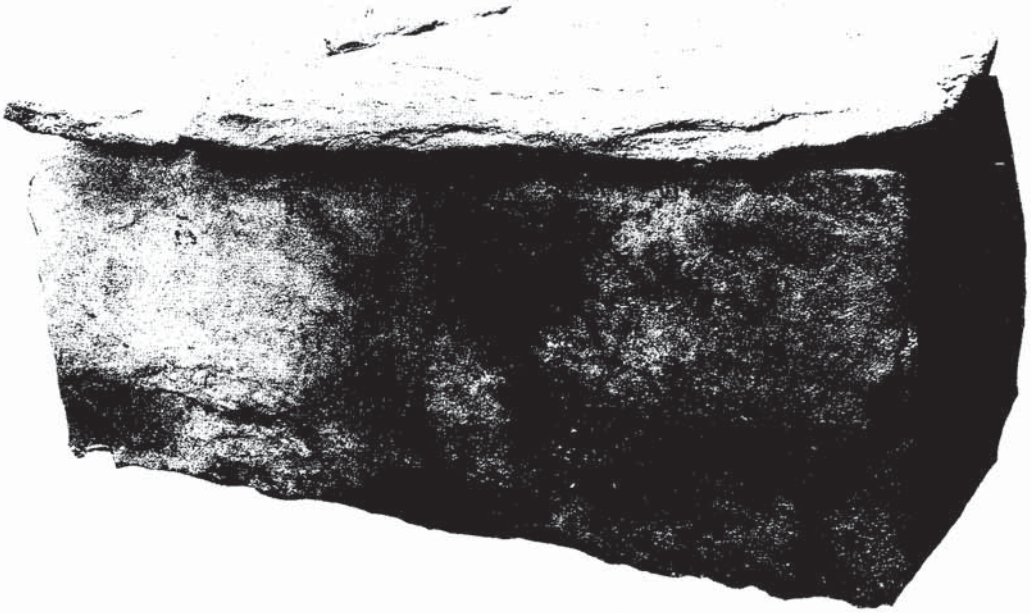
『古墳誌』には記されていないが現在、保管されている遺物の中に鉄釘が含まれていることから木棺が存在していた可能性が高い。

【遺物の出土状況】

遺物は当時の記録によると玄室の四隅に鉄鈴が各１点ずつ計４点出土している。この鈴同士を繋ぐようにして鉄の棒が存在したらしい。また玄門部付近で土器が出土したことが記されているがこの土器の器種については不明である。



第４図　堂ノ前塚古墳石室復元図



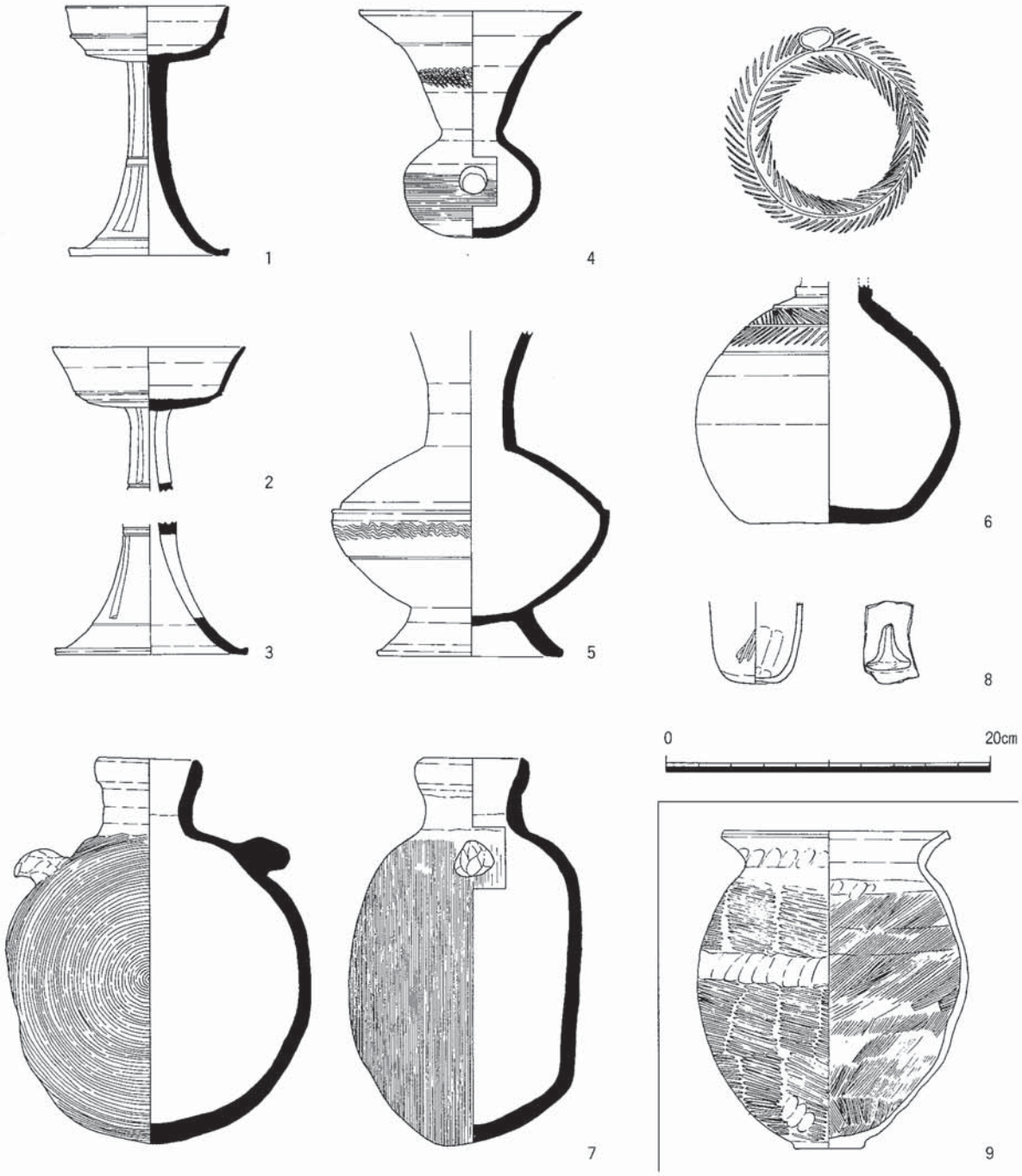
掘發リヨ跡寺蓋紫　棺石墳古　藏所吉駒野浦　曾尾村市高郡市高國和大

掘發リヨ跡寺蓋紫　棺石墳古　藏所吉駒野浦　曾尾村市高郡市高國和大

写真１　堂ノ前塚古墳出土箱式石棺

Ⅲ、堂ノ前塚古墳出土遺物

今回、堂ノ前塚古墳出土の遺物を実見する機会を得たので実測調査を行った。現在、保管されている遺物は須恵器、土師器、鉄製品そして堂ノ前塚古墳以外では弥生系甕がある。



第5図　堂ノ前塚古墳出土土器（1：4）

【須恵器】

無蓋高杯（第５図－１）

口径10㎝、器高15.4㎝を測る。長脚二段で長方形のスカシを２方向から穿つ。杯部は外上方に緩やかに開いている。杯部中程に稜線があり、脚部中央には２条の凹線が認められる。調整は回転ヘラ削りの後、回転ナデが行われている。

無蓋高杯（第５図―２）

口径12㎝、残存高９㎝を測る。長脚二段で長方形のスカシを３方向から穿つ。口縁部はやや外反しながらハの字状に立ち上がり端部を丸くおさめる。脚部の約1/2から下部は失われている。調整は回転ヘラ削りの後、回転ナデが行われている。

高　　杯（第５図－３）

残存高８㎝、底径11.8㎝を測る。長脚二段で長方形のスカシを３方向から穿つ。脚部中央に２条とスカシの下に１条の凹線が認められる。調整は回転ヘラ削り後回転ナデを行っている。

瓿　（第５図－４）

口径13.8㎝、器高14.1㎝を測る。形態をみると口縁部は上外方へ直線的に伸びており、端部は水平な面をもつ。頸部には櫛描き波状文を体部にはカキ目を施している。体部中央には一方向からの円孔を穿つ。口縁部の1/2が欠損している。回転ヘラ削りの後、回転ナデを行う。

台付長頸壺（第５図－５）

残存高20㎝、底径11.5㎝を測る。口頸部はやや外反しながら立ち上がり、体部中央に最大径をもつ形状をなしている。体部中央に櫛描き波状文と一条の凹線が施されており、脚部はラッパ状を呈している。頸部は1/3欠損している。

細頸壺（第５図－６）

残存高14.4㎝を測る。形態は体部中央に最大径をもつ球体をなしており、底部は平底である。肩部には綾杉文が施されている。肩から体部中央にかけて自然釉が認められる。頸部から上は欠損している。調整は回転ヘラ削りの後、回転ナデを行っている。

提　　瓶（第５図－７）

口径６㎝、器高23.4㎝を測る。体部の前面は丸く膨らみ、両側に付く耳は鉤形を呈している。口縁部は直線的に立ち上がり端部を丸くおさめる。体部にはカキ目を施している。

【土師器】

把手付椀（第５図－８）

現在２点保管されており接合することはできないが同一個体と考えられるミニュチュア製品である。形態は薄手で丸みを帯び底部から外上方に緩やかに立ち上がり、椀の中程で先端を尖らせた把手が取り付く。調整は底部外面と内面全体はヘラ削り、椀外面はナデの後ミガキを施している。

【その他】

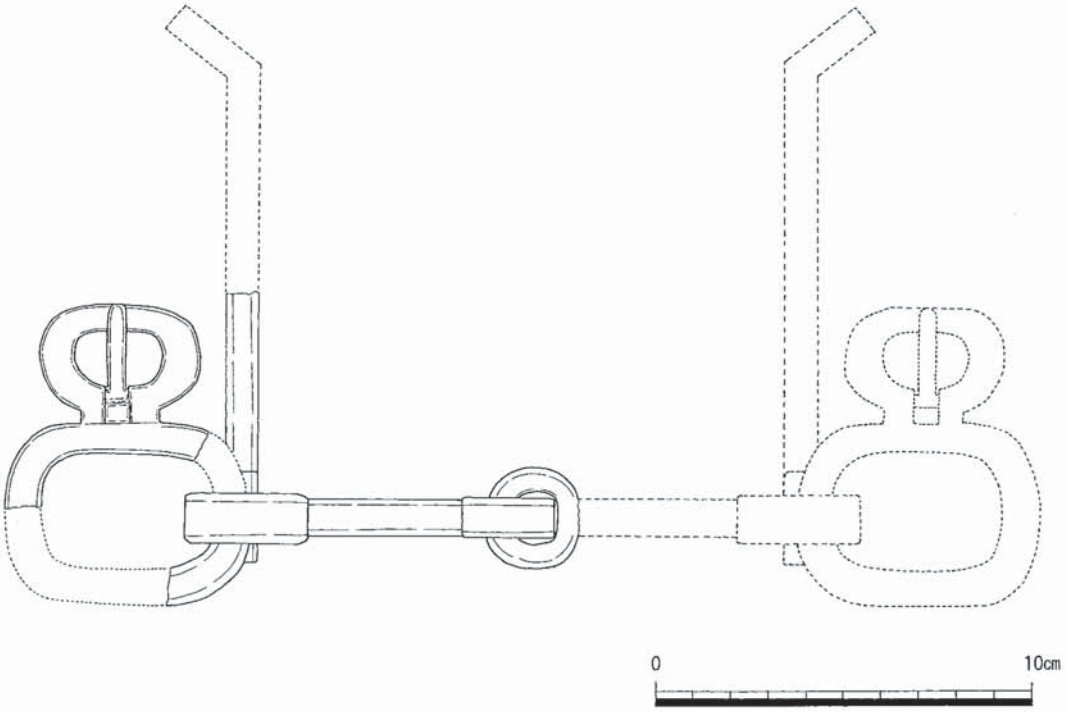
弥生系甕（第５図－９）

口径13.7㎝、器高19.5㎝を測る。体部外面は粗い左上がりタタキを内面には右回り斜めハケを施し、口縁部は横ナデを行っている。この甕は全体のプロポーションをみると球形化が進んでおり、底部の突出が顕著でない平底であることなど形態的特徴から庄内大和型の技法を模倣した五様式系の在地甕であろう。時期は庄内式併行期に位置づけられる。

【馬　具】

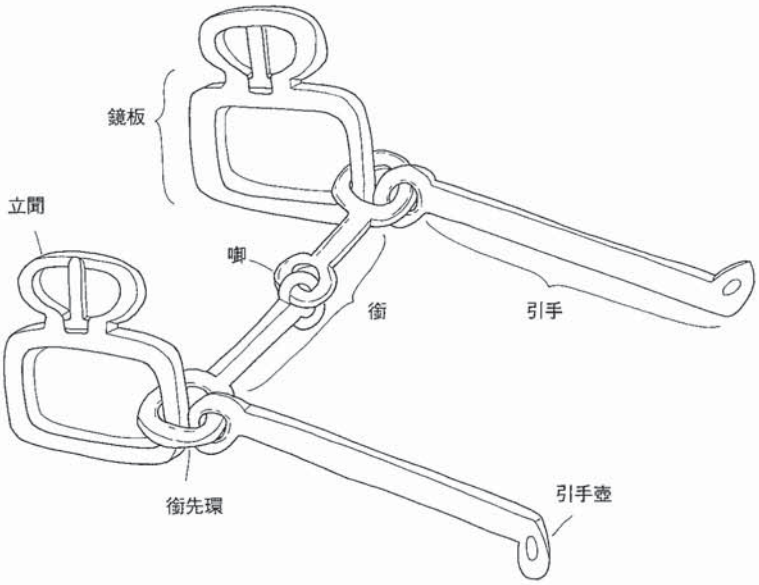
鉸具立聞素環鏡板付轡（第６図）

鏡板の環体、銜、引手の取り付き形態は銜先環に鏡板の環体と引手とを結合するものである。鏡板の環体は直径1.1㎝で断面楕円形を呈しており稜などは認められない。鏡板の環体の長径は6.4㎝（内径4.4㎝）、短径4.8㎝（内径３㎝）を測る。立聞は鏡板の環体から鉸具部の間５㎜ほどの頸部をもつ。鉸具部の環体は楕円形で長径4.2㎝（内径2.2㎝）、短径2.8㎝（内径1.4㎝）を測る。刺金は長さ2.5㎝である。銜の長さは啣と銜先環の間約4.0㎝を測る。



第６図　鉸具立聞素環鏡板付轡（１：２）

第７図　面繋着装図



第８図　鉸具立聞素環鏡板付轡模式図

【鉄製品】

鈴　（第９図－１）

形態については上からの平面が正円形に近く、立面形はやや横長の球形である。胴の中央には径約7.2㎝、幅３㎜の突帯がつく。この突帯部分で上下に分かれるがその接合面は下部を構成する突帯が上部を構成する突帯部分を覆う形となっている。鈴口は胴部下半上部に入れている。鈕の形態は失われており不明である。鈕は鈴の胴部とは別作りで取り付きは胴部内面の頂上部に穴を穿孔し、内側から鈕を差込んでいる。胴部頂上部には鈕の付根部分に破損した痕跡があり鈕を固定するための突起などがあったと考えられる。丸は胴部の一部が破損しているため失われている。材質は鈴の表面が薄緑色をしているので銅鈴の可能性が高い。

円形飾金具（第９図－２）

体部は半円形を呈しており端部は約５㎜張り出している。体部頂上には頭部約1.5㎝四方の釘状のものが差し込まれている。この頭部から斜め上方に向かって約７㎜四方の棒状のものが伸びている。棺座金具の一部か鞍の一部と考えられるが用途については不明である。

鉄　　刀（第９図－３）

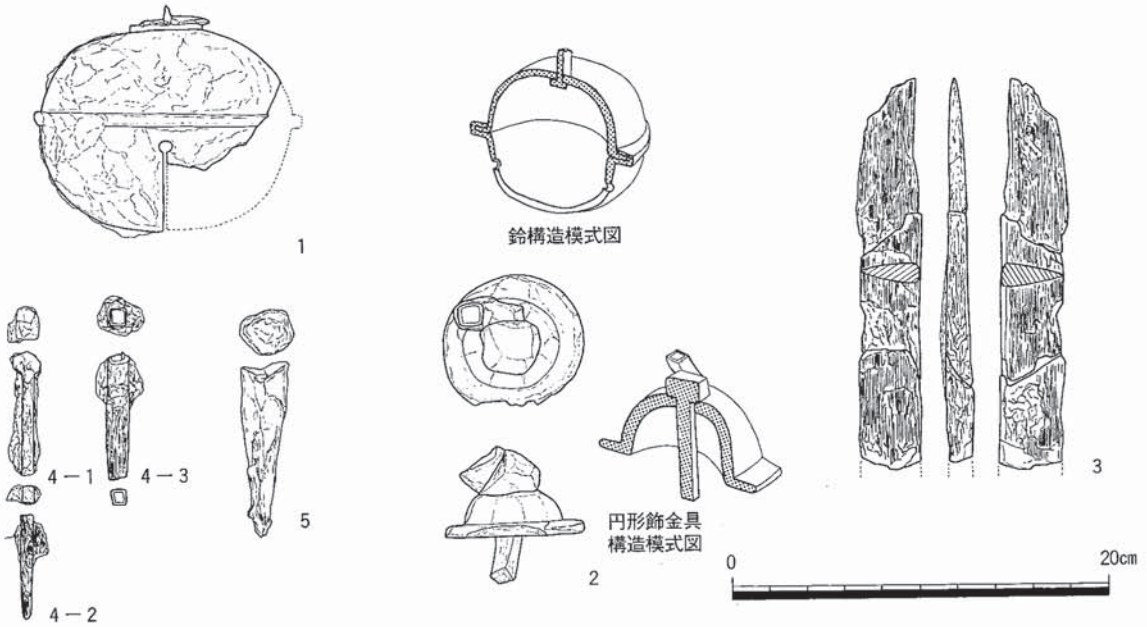
刀身部分は現在３つに分かれているが接合可能であり同一個体であることがわかる。刀身の残存長は20.7㎝、刀身幅3.2㎝、棟の厚さ約１㎝を測る。刀身表面には広い範囲に木質が付着しており、鞘木に収められていたことを示しているが鞘木の表面は残っていない。

鉄　　釘（第９図－４）

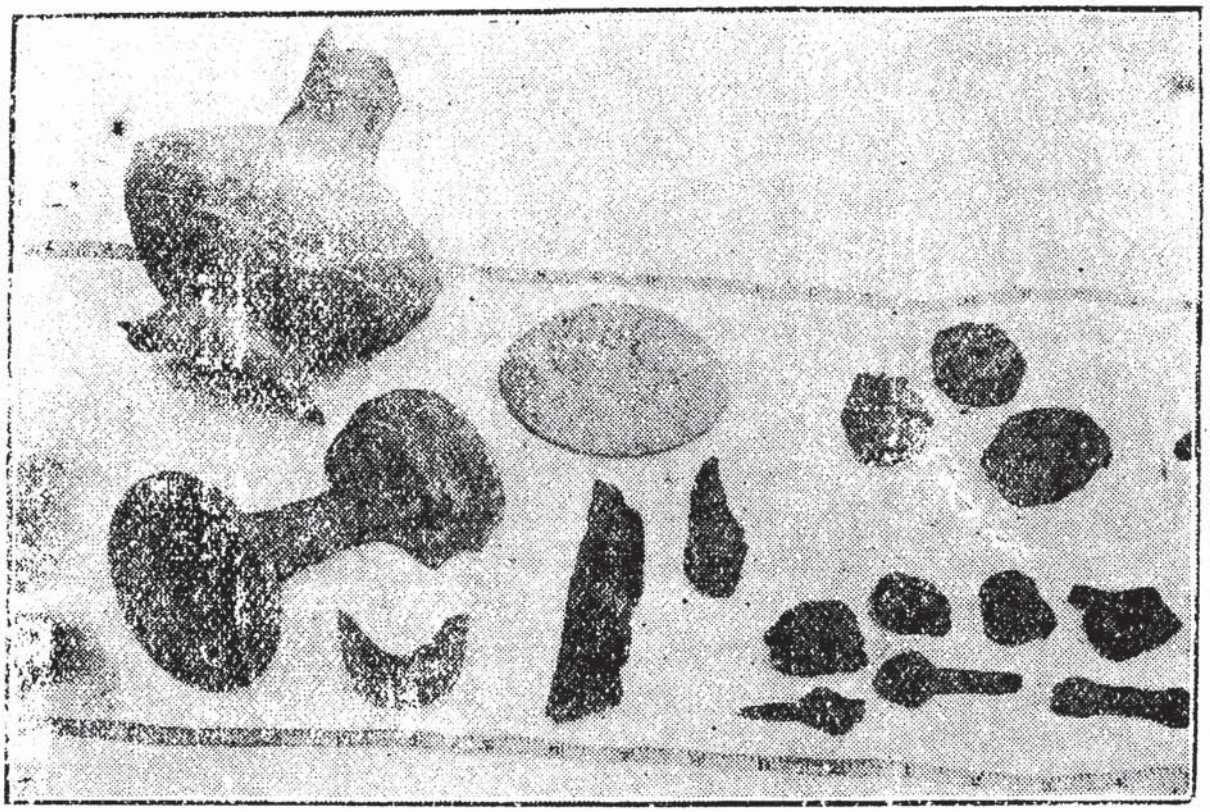
鉄釘は現在３点保管されている。内２点は接合できないが同一個体の可能性が高い。１は頭部が正方形で頭部と身部に境を持つ。残存長は6.6㎝で身部の幅は0.7×0.9㎝を測る。２は釘の先端部分で残存長は5.7㎝である。３は残存長6.7㎝を測り、頭部が欠損している。身部の幅は0.7×0.8㎝である。

不明鉄製品（第９図－５）

石突状のもので内部は中実である。長さ9.8㎝を測り、先端は尖っている。



第９図　堂ノ前塚古墳出土鉄製品（１・２のみ１：２）



器土部祝・器鐵・鈴鐵（時同ト棺石立組）品土出リヨ前堂字曾尾字大村市高

写真２　堂ノ前塚古墳出土遺物（一部）

Ⅳ、まとめ ～出土遺物の検討～

『古墳誌』に掲載（写真２）されているものの中で現在失われている遺物は須恵器の杯や鋤先などがある。また鈴三点が所蔵されていることも記されているが現在は１点のみとなっている[4]。これはかつて上付近の小屋で土器などを展示していたらしく談山神社に詣でる旅人らがこれらの土器に見入っていたという[5]。この際に一部の遺物が紛失した可能性も考えられる。他に棒状鉄製品についても現在は失われており、不明な点が多い。堂ノ前塚古墳出土以外の遺物では弥生系甕や有蓋高杯があるが有蓋高杯は現在失われている。また弥生系甕については近在から採集されたもののようであるが詳細については不明である。

≪土　器≫

今回実見した須恵器についてみてみると無蓋高杯は長脚二段でスカシが３方向（第５図－２・３）あるものと２方向（第５図－１）のスカシを有しているものがあるが前者はＴＫ43型式であり、後者はＴＫ209型式古段階のものである。提瓶は扁平な円球形で体部に口頸部を付し、鉤状の突起を施しているものでＴＫ43型式である。台付長頸壺は底部に貼付された脚は短く二段スカシを伴わないものでＴＫ209～ＴＫ217型式と考えられる。𤮈は口頸部の基部が細く、ラッパ状に外反し頸端部で段を有しながら更に外反するものでＴＫ43～ＴＫ209型式のものである。細頸壺は胴部が丸く張っており、底部は平底を呈したものでＴＫ209型式であろう。

このようにみていくと堂ノ前塚古墳出土の土器は概ねＴＫ43からＴＫ209型式の時期と考えることができ、堂ノ前塚古墳の初葬は６世紀後半頃に求められ、追葬が７世紀初めと想定できる。つまり緑泥片岩の石棺が初葬で鉄釘などの存在から木棺が追葬されたものと考えられる。

≪馬　具≫

馬具については実見した際、鉄の塊で形態については不明であったがクリーニングの結果、鉸具立聞素環鏡板付轡であることが明らかとなった[6]。形態は銜先環に鏡板環体と引手が取り付くもので向かって左側部分の啣から引手の一部分までが残存している。形態的特長から7世紀第Ⅰ四半期頃（坂本2000）のもので出土した土器群とも年代的に一致している。これ以外の馬具は出土していない。

≪鈴の用途について≫

鈴については多くの場合、石室内から出土しているが攪乱などにより当時の状態のまま出土する例がほとんどなく用途については不明な点が多い。鈴が現位置で出土した例として島根県の上塩冶築山古墳では馬具が置かれていた場所とは異なり石棺の前面に鈴がまとめて置かれていたようである（加古1975・松尾1999）。奈良県新庄町にある寺口忍海古墳群Ｈ－31号墳では馬具はなく農工具中心の遺物の中に銅鈴１点が出土している（千賀ほか1988）。また千葉県にある金鈴塚古墳では金鈴５点、金銅鈴54点が組合箱式石棺内から出土しており死者の体を覆う布に縫い付けられたものと考えられるものも出土している（瀧口1952・加古1975）。堂ノ前塚古墳では轡などの馬具が出土しており馬鈴との関係も想定できるが出土時の様子から石棺の四隅に置かれていたようでこれを重視するならば葬送儀礼に伴うものと考えることもでき馬鈴以外の用途についても今後検討を要する課題である。

堂ノ前塚古墳についてはこれまで細川谷古墳群を説明する際、七曲塚古墳と共に必ず名前の挙がる古墳にもかかわらずその実態についてはよくわからなかった。今回、出土遺物を実見する機会を得、これまで不明であった堂ノ前塚古墳の様相が明らかになるとともに細川谷古墳群の研究にも寄与できたものと考えている。しかし実見した馬具などの鉄製品については肉眼観察によるものでＸ線撮影などを行っておらず今後の成果によっては若干の修正も考えられ、資料の増加をまって改めて検討したい。

今回、小稿を執筆するにあたり次の諸氏から有益なご助言を賜った。また資料収集にあたって便宜をはかっていただいた。ご尽力を賜った各氏に感謝の意を表します。（五十音順、敬称略）
相原嘉之、浦堅正夫、浦堅正昭、浦堅公代、浦野喜徳、北野耕平、木下　亘、篁園勝男、
伊達宗泰、千賀　久、辻本宗久、林部　均、前坂尚志、

引用・参考文献

石野博信・関川尚功1976『纒向』奈良県立橿原考古学研究所

泉森　皎1976「上居49号墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第28集　奈良県立橿原考古学研究所

加古千恵子1975「古墳出土の鈴について」『二見谷古墳群』城崎町教育委員会

橿原考古学研究所1976『石舞台地区国営公園予定地　石舞台古墳及び周辺の発掘調査概要』

橿原考古学研究所編1998『奈良県遺跡地図　第３分冊』

亀田　博1995「上66号墳」『奈良県遺跡調査概報1994年度』奈良県立橿原考古学研究所

亀田　博1995「細川谷古墳群」『明日香風』54号　㈶飛鳥保存財団

坂本美夫2000「鉸具立聞素環鏡板付轡の初現期の様相」『考古学論究』第７号

清水康二ほか1999「細川谷古墳群（上５号墳）」『奈良県遺跡調査概報　1998年度』奈良県立橿原考古学研究所

白石太一郎1974「明日香村打上塚古墳」『奈良県の主要古墳Ⅱ』（緑地保全と古墳保護に関する調査報告二）奈良県教育委員会

関川尚功ほか1997「細川谷古墳群」『奈良県遺跡調査概報　1996年度』奈良県立橿原考古学研究所

高市郡役所編1923「堂の前塚」『奈良縣高市郡古墳誌』名著出版1971復刻

瀧口　宏編1952『上總金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室

伊達宗泰1974「細川谷の古墳群」『明日香村史　上巻』明日香村史刊行会

千賀　久ほか1988「Ｈ－31号墳」『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第１冊　新庄町教育委員会

野沢昌康他1976『天神のこし古墳』春日居町教育委員会

花谷　浩1983「馬具」『湯舟坂２号墳』京都府久美浜町文化財調査報告書第７集　久美浜町教育委員会

松尾充晶1999「銅鈴の用途」『上塩冶築山古墳の研究』－島根県古代文化センター調査研究報告書４－　島根県古代文化センター

註

1)、堂ノ前塚古墳は明治25年頃発掘されたと考えられる。

2)、結晶片岩使用の古墳については別稿にて検討したい。

3)、遺跡地図には17－Ｂ－195と記されているがここでは小字などから戒成組田古墳と仮称する。

4)、残りの鈴についてはいずれかの博物館関係者が持ち出したまま行方不明となっている。

5)、浦野正夫氏から御教授を得た。

6)、類例としては山梨県の天神のこし古墳などがある。

挿図出典

第１図：明日香村都市計画図（１：10000）　平成９年修正、一部加筆。

第２図：明日香村都市計画図（１：2500）　平成９年修正、一部加筆。

第３図：明日村役場蔵より再トレース。

第４図：『奈良縣高市郡古墳誌』より転載。

第５図：筆者が所有者宅において実測した。

第６図：筆者が所有者宅において実測した。

第７図：筆者作成。

第８図：筆者作成。

第９図：筆者が所有者宅において実測した。

写真１：篁園勝男氏提供。

写真２：『奈良縣高市郡古墳誌』より転載。

表１：筆者作成。

番号	器　種	法　量（cm）	色調	胎土	焼成	備　考
1	須恵器　無蓋高杯	口　径10.0、器　高15.4	青灰色	密	良好	杯部1/2欠損。
2	須恵器　無蓋高杯	口　径12.0、器　高 9.0	青灰色	密	良好	脚部1/2欠損。
3	須恵器　高　杯	口　径　－、残存高 8.0	青灰色	密	良好	脚部1/2から上、欠損。
4	須恵器　　𤭯	口　径13.8、器　高14.1	灰	密	良好	口縁部1/2欠損。
5	須恵器　台付長頸壺	胴部径12.0、残存高20.0	青灰色	密	良好	頸部1/3欠損。
6	須恵器　細 頸 壺	胴部径16.2、残存高14.4	暗灰色	密	良好	頸部から上、欠損。体部に自然釉。
7	須恵器　提　　瓶	口　径 6.0、器　高23.4	灰色	密	良好	完形。
8	土師器　把手付椀	胴部径 5.6、残存高 5.0	黄橙色	密	精良	胴部1/2より上、欠損。把手部分残存。
その他						
番号	器　種	法　量（cm）	色調	胎土	焼成	備　考
9	弥　生　系　甕	口　径13.7、器　高19.5	褐色	やや粗	やや良好	二つに分かれているが完形。

表１　堂ノ前塚古墳出土土器観察表